

中国の都市における下層社会研究の経緯と課題¹⁾

陳 映 芳
(中生 勝美 訳)

要 旨

近年、中国の社会学学界で階層社会化問題と貧困対策問題について関心を集めている。この論文は、中国都市部の下層社会に関する研究史を概観し、今後の研究の方向性を示した。最も初期は、20世紀初頭の外国人研究者と宣教師による中国の都市下層社会の研究である。次の段階は、1930年代に中国人研究者が、中国の現状に適合した社会学調査をおこなうようになった。中華人民共和国建国後、1950年代から徐々に社会学部が廃止されたが、1980年代から社会学部が復活し、都市の市民生活に関する調査が実施された。1990年代の研究傾向は、リストラ（下崗）労働者問題の研究、社会階層化研究、社会貧困問題研究が主流となった。都市の下層社会に関する研究史をまとめた後、現在直面する都市下層社会の研究に関する理論的課題について、都市生態学の研究、生活構造理論の導入、国際比較研究方法の運用を提唱している。

キーワード：下層社会、都市問題調査、家計簿調査、貧困問題、流動人口

ここ数年来、中国の社会学学界において、階層社会化問題と貧困対策問題について多くの研究者が関心を集めている。本稿では、都市下層社会の調査と研究がいかに展開してきたかという点に関して、筆者の考えを披露したい。

ここ数年来、筆者は都市の貧困層、出稼ぎ農民、都市への外来労働者を調査してきたので、この過程で知りえた中国都市社会学史の関連研究をまとめてみたい。筆者は中国の都市下層研究の研究史を整理したうえで、いかに都市下層について社会学的研究を展開するのかという点の私見を本稿で提起したい。

1 初期社会調査における都市下層社会の研究

(1) 20世紀初頭のキリスト教会と外国人教師組織による都市の社会調査

中国20世紀初頭の都市社会調査は、社会学の中国導入と発展に密接な関係がある。社会学の中国導入に主要な役割を果たしたもの一つはミッションスクールである。1908年上海のセント・ジョン大学が社会学コースを開設し、1913年上海滬江大学（原名：Shanghai Baptist Church University）は社会学部を創設したが、これは中国で最も早い社会学部である。1917年、上海滬江大学社会学部は、教育実習地として“滬東公社”を創設し、上海楊樹浦一帯の労働者のために地域サービスを提供した。

第一次世界大戦の間、中国の国内工業は大き

く発展し、工業化と都市化が連動して労働問題を引き起こし、キリスト教青年会は一連の労働問題およびその他の問題の調査を進めた。一部のミッションスクール教師の主催で社会調査運動を組織した。初期の社会調査の多くは外国人宣教師や外国人教師が中心となり、調査内容の選定と調査法はアメリカの影響が非常に大きかった。当時の主要な都市の社会調査には次のようなものがある。

1914年、北京 YMCA（キリスト教青年会）が北京302人の人力車労働者の生活情況について調査を始めたが、これは中国において初の都市の人力車労働者の調査であり、中国初期の社会調査運動の端緒となった。

1917年、清華大学のアメリカ国籍の教授ディットマー（G. G. Dittmer）は、学生を指導して、（当時清華大学は社会学部が設立されていないが、社会学コースはすでにあった）²⁾北京の西側郊外195世帯の住民生活費を調査分析したが、その内訳は漢族100世帯、満州族95世帯で、職業は工場労働者・農民・車夫・軍人・大工・理容師及びわずかな学生などを含んでいた。

1918-1919年の間、燕京大学社会学部主任バージェス（J. S. Burgess）とアメリカ国籍宣教師ギャンブル（S. D. Gamble）などは、アメリカのラッセル・サージ基金（Russell Sage Foundation）が組織したスプリングフィールド調査をモデルに、北京で比較的大規模な都市調査を実施した。調査内容は、北京の社会状況を含み、歴史・地理・政府・人口・健康・経済・娯楽・売春婦・貧民・救済・宗教などの項目に及び、調査結果は1921年にアメリカで『北京：社会調査』という英文によって公表された³⁾。

1924年に、キリスト教系の齊魯大学の社会学部の学生が、内外の教師に指導され、濟南市の社会概況について調査を進め、濟南市の歴史・地理・人口・行政管理・公共事業・地方財政・労働制度・教育制度・娯楽活動・売春婦・工業状況・生活水準・住宅・慈善事業・教育体制・文化と教育機構・宗教機構・女性問題・家庭状況・キリスト教活動などに及び、内容は相当豊富で、調査の結果は『濟南社会一瞥』と題して同年に英文で発表された。

(2) 20年代に始まった中国社会学者が従事した都市問題調査

1920年代初頭、中国の社会学者もわずかながらではあるが小規模な社会調査を始めていた。例えば滬江大学の広東省鳳凰村調査及び沈家行の実地調査、また李景漢による北京の人力車夫生活費調査などがある。初期の調査の多くは、農民や工場労働者の生活費調査に偏っていた。

その一方で、20年代から中国人学者は西洋人がおこなった調査に不満を感じ始めており、費孝通教授は、次のように回顧している。「（30年代）燕京大学社会学部の社会活動に不満を感じる一部の教師や学生がいたが、私もまたその中の一人で、『理論が必要だ』という願望を提起した。しかし、また同時に米英の資産階級の『社会理論』が中国の情況に合わないことも感じていた。それでどうするか？ということで、手始めに社会調査をしようと考えた。しかし当時またギャンブル（中国名は甘博）やバージェス（中国名は歩済時）の調査、さらに清河と定県での社会調査はあまりに表面的で問題を解決できず、他に活路を求めるよと思った」（費孝通1999：32）。もう一方では、中国社会学の教育や科学的研究グループが次第に形成されると、中国人社会学者が自分たちで試みようとする条件を備え始めた。彼らは社会学の理論と方法を中国社会の実情に結び付けることに力を注いだ。全国的な調査研究の機関が次第に設置され、中国社会学者が自ら組織し主催した大規模な社会調査を相次いで展開した。

当時の主要な調査機関には「社会調査所」及び「中央研究院社会学研究所」があった。社会調査所の前身は1926年に成立した中華教育文化基金会理事会社会調査部で、1929年に社会調査所と名称を変更し、所長は陶孟和が就任した。この研究所は大量の調査研究をした。その中で有名なものは、李景漢の『北平郊外郷村家庭』⁴⁾、陶孟和の『北平生活費の分析』、楊西孟の『北平生活費指数』などである。この他、我々が参照にできる調査成果は、林頌和が書いた『塘沽（天津）労働者調査』（社会調査所）、楊西孟が書いた『上海労働者の生活レベルの一研究』（社会調査所）、施裕寿等による『山東中興炭鉱労働者調査』、麦倩曾が書いた『北京の娼妓調査』（『社

会学界』1931年第5巻), 許仕廉が書いた「一小市鎮調査の試み」(『社会学界』1931年第5巻), 牛鼐鄂が書いた「北京1200貧困世帯の研究」(『社会学界』1933年第7巻), 劉寶衡が書いた『上海市人力車夫の生活状況調査報告書』

(1934年, 市社会局), 楊西孟が書いた『上海労働者の生活レベルの一研究』(社会調査所), 社会局がまとめた『南京社会』(1934年, 南京局), 楊蔚が書いた『成都市生活費の研究』

(1940年, 金陵大学農学院), 史國衡が書いた『昆明の工場労働者』(1943年, 商務印書館), 社会部がまとめた『成都社会概況調査』(1944年, 社会部統計所) などである。

(3) 初期の都市下層社会調査の評価

『北京: ある社会調査』の出版以降, 全国で社会調査が流行した。その後, 20年代から始まったアメリカの都市社会学・人類学を模倣した社会調査が大量に出現してきたが, その主要な内容は人口・労働者・風俗・婦女・教育・災害・社会概況などであった。各種の社会調査が数多くなされた。燕京大学社会学部の学生がとった統計によると, 1927年から1935年のわずか9年間で, 全国各種類の大小社会調査報告書は9027件にのぼる。

この調査を総合的にみると, 我々は顕著な特長を見出すことができる。①下層階級への関心。上述した調査結果以外にも, まだ例えば中央研究院社会科学研究所の王際昌が1929年から1930年の間に, 40人あまりを指導して上海市楊樹浦地区の労働者が従事した仕事の調査などがある。②「生活」を重視した調査研究。端的な例は, 1926より1927年に至るまでの間におこなった陶孟和の『北平生活費の分析』である。彼は家計簿方式を採用して, 北京の48世帯の手工業労働者の家庭生活費用を6ヶ月間調査し, 12世帯の小学校教員の生活費用を1ヶ月間調査した結果をまとめた。家計簿方法を採用した調査は, 当時画期的ことで, この報告書は国内において家計簿方式を採用して労働者の家庭生活費用の調査をした最初のものとなった。その後, 各地の生活費の調査で, 大半がこの方法を採用したので, この方法論で比較的大きな貢献があった。③理論・方法論上の成果は比較的明

瞭な限界がある。調査の内容は, 分散や重複の問題があった。方法論は, 海外の研究を模倣することが多いので独自に編み出した方法は少なく, 調査手段は比較的単調で, 主にアンケート調査の手法を採用していた。この他, 学術面での向上が欠乏し, 社会調査を用いて, 社会学理論の傾向を踏まえた調査がやや少なかった。④政府の制度的な支持の欠乏。中国の各級政府は, 一貫して都市の貧困情況についての制度的な調査を実施しなかったので, 社会学者や各種民間機関の調査成果を問題解決するための実際的な効果に生かせなかつたのである。

以上をまとめると, 中国初期の都市生活調査が実施されたのは都市社会学学科の設立よりも早いといえる。当時の調査の絶対多数は, 社会の現実を理解し反映することで社会を改良する目的があった。ある種の意義からいえば, これらの調査は中国の社会学が歩み始めた最初の一歩を示しており, 社会的公正の問題に关心を持つという基本的な学問的性格を具えていた。ただし, 研究グループの学術的な準備などの条件に制約され, これらの調査は往往にして確固とした理論支柱が欠落し, 学術上の収穫として目に見えて優れたというものではなかった。当時の調査者が主として手本としたアメリカの都市社会調査や都市社会学研究との落差はきわめて大きかった。例えばこれらの調査は社会構造から着手した分析や解釈ではなかった。具体的な調査で, 同時期のアメリカ・シカゴ学派の都市生態学や都市人文区域学などの方法を採用しなかつた。

1930年代からは, 農村社会学が中国で勃興した。農村復興運動の展開と農村社会調査が, しだいに都市社会調査から主導的な地位を取り始めた。趙承信の統計によると, 1927年に行なわれたすべての地方社会調査の68.6%は都市社会調査であり, 6.5%が農村社会調査で, その他は全国的な調査であった。それが1933年になると, 農村社会調査は初めて都市調査を上回り, 1935年になると、都市調査は23.8%まで下がり, 農村調査は37.8%まで上昇した。この現象の背景は, 中国における農村問題が日増しに深刻化して, 政府が農村問題の調査を推進し始めたからである。多くの調査プロジェクトは政府

の関係部門に接収されて、通常の調査プロジェクトに組み込まれ、政府行政の仕事の一部分となつた。これに伴い、都市社会調査は衰退し始めた。

2 社会学再建以来の都市貧困問題の研究

(1) 都市調査の停止と回復

共産党が政権についた初期に、社会学者が参加した都市の社会改革運動が、ある程度の研究成果を生んだ。広州市の嶺南大学社会学部の教員と学生達は、楊慶堃の指導により、売春婦・乞食の調査研究と改善事業に参加したことがあり、何肇發は、当時乞食の収容改善運動に参加した経験に基づいて「広州市乞食の事例研究」という論文を書いた（何肇發 2001：278）。

1950年代から、一方では社会学専攻が廃止されるに従い、中国の社会調査運動が基本的に消滅した。もう一方では新たな意識形態と社会制度の確立に伴い、「階級」「階層」に関する概念に変化が生じた。1956年の社会主义改造運動の後、「搾取階級」は一つの階級の実態として既に二度と存在しないと認識された。社会全体で、ただ二つの階級のみが存在した。つまり一つの階層は「労働者階級」・「農民階級」であり、もう一つは知識人階層であった。これと同時に、労働者階級と農民階級は執政政党の階級基盤の中核たる同盟軍として、政治と経済の上で「翻身（解放されて立ち上ること）」が実現できると認識されており、「貧困」・「下層」といった概念や問題も徐々に消滅していった。

中国の社会学専攻は1979年に回復した。1981年に設立した中国社会科学院社会学研究所は、北京市宣武区椿樹胡同で都市社区の研究を展開し、居住者の生活や家庭結婚などについて調査を進めた。それ以後、各種の都市社会問題の調査とそれに関連する学術研究が徐々に増加し、調査と研究もまた次第に展開した。1980年代以来の比較的著名な都市社会調査は、次のものがある。

1983年10月、天津社会科学院社会学研究所と天津市人民政府の共同で、「天津市1000世帯住民のアンケート調査」を行ない、調査は天津

の9つの市区、35の街道⁵⁾の1000世帯住民にわたり、内容は都市住民の社会生活の各方面、および政府の仕事に対する住民の評価に及んだ。その後、天津市の調査法は継続され、他の多くの地方政府も天津市の調査法をモデルとして、類似した都市住民の社会生活調査を実施し、政府が政策を決定するための科学的根拠を提供した。たとえば、浦東新地区政府と上海復旦大学社会学部が共同でおこなった浦東地区住民の調査も、この種類に属している。この他、各地の政府が都市発展と市民生活を調査したものがあり、例えば上海には『2002年上海社会発展白書—都市の管理と市民の素質』がある。

(2) 1990年代以降の調査研究

1990年代以来、社会下層の調査と研究をした社会学者は、主として次のような注目すべき成果をあげた。①リストラ（下崗）労働者問題の研究、②社会階層化研究、③社会貧困問題研究。

1990年代から、多くの国営企業・集団企業の労働者のリストラは大きな社会問題になっており、これと同時に、「社会階層化」と「都市貧困」の問題は、中国社会において顕著になり始めた。それゆえに、以上の諸問題の研究は、ほとんど同時に社会学の研究テーマになったのである。この種の研究は、各クラスの公的な科学研究機関と政府部門から援助と支持を受けた。1990年代後半以降、国家と各省の各種科学研究プロジェクトが立案される中で、リストラ労働者問題、社会階層化問題、都市貧困問題などずっと第一の地位を占めている。それに応じた成果もまた多く出版された。

各種の研究成果の中で、李強の『現代中国の階層化と流動』は、労働者の問題と「城鎮労働者の貧困層」問題にまで及んでいる。そして彼と胡俊生・洪大用の共著である『失業リストラ問題の比較研究』の中で、都市の失業者やリストラされた人たちの問題は、具体的分析と国際比較で意義のある研究である。1990年代以来の各種の社会調査で、李強の一連の実証的な調査は中国社会学界へ大きな影響を及ぼした。

「都市の貧困問題」は多く貧困対策（貧困扶助）問題と社会保障問題が連動している。各種の政府の科学研究プロジェクト以外は、世界銀

行・アジア発展銀行・国家統計局・民政局などの部門が課題の展開を促進した。閔信平・洪大用・王有娟等の研究者たちは、相応の調査研究にたずさわった。中国都市の貧困の概念・定義・モデル分類・規模の状況・形成の原因・貧困扶助政策など問題に関して、既にかなりの成果が現われている。

「社会階層化」の研究は、数年前の中国社会学界でかつて焦点となったテーマで、各地でかなり価値のある調査報告が現われた。その中で最も影響があるのは、中国社会科学院社会学研究所の『現在中国社会階層研究報告』を挙げることができる。当該報告は「階層」の概念を社会学界から全社会へ拡張した。同時に、それは明確に各種職業集団で区別した階層で均等に配列した、いわゆる「十大階層」(国家と社会管理階層：経営者階層：私営企業経営者階層：専門技術者階層：事務階層：個人商工業戸籍階層：商業サービス階層：産業労働者階層：農業労働者階層：都市の無職・失業とフリーター階層)に区分し、それを更に中国社会の区分を進めて5つの階級にした。このような研究が、都市社会の下層をはっきりと浮かび上がらせた。

3 都市下層研究の直面している課題

(1) 「都市下層」の概念と社会構成について

1990年代以来の社会学研究のなかで、上述したように、都市の下層については、既に関連する問題について多くの調査研究がある。都市下層集団は一般に「リストラ労働者」「貧困集団」「劣勢集団」など特別なグループとして言及される。如何にして「都市下層」を一つの独立概念として確立するのかは、さらに研究が展開しても、依然として課題になる。

具体的な貧困集団に対応して一つの階層概念とするならば、「都市下層」の包括する範囲は更に拡大しなければならず、その区分や基準もまた財産収入に限定すべきでない。同時に、「都市下層」は都市社会に存在し、それは農村社会の貧困層とすでに区別しており、同時にまたあらゆる都市の下層居住者を包括せねばならず、しかも専ら都市戸籍を持つ住民のみを指すのでは

ない。このほか、「都市下層」問題を学術的に指すのは、下層階級居住者の生活状況に関する側面である。そして「貧困」を問題としても、それは単なる経済的な収入の問題だけではなく、現代の都市社会の中の「貧困」問題は社会制度・産業構造、さらには社会資源・文化資源・種族一民族、居住区域、生活様式など各方面に及んでいる。

都市下層の基本構成について、目下国内にすでに都市の貧困研究は、主として社会保障制度の角度から出発して、都市戸籍を持つ都市住民の範囲に研究対象を限定している。筆者は基本として社会事実自体の学問的理念に関心を払うのは当然として、さらに都市の社会問題への関心に基づいており、研究者はすべて都市に実際居住している者すべてを研究の範囲に入れなければならないと認識している。目下、中国の一般的な都市社会の状況から見ると、所謂「都市下層」は、大体以下の幾つかの外的要因構成であると認識している。

- ① もともと都市の下層階層の成員とその家族。旧スラム街地区（たとえば上海の棚戸地区・下只角）の居住民、低所得労働者、保障のない高齢者、障害者などやその家族。
- ② 新たに形成された都市貧困層の成員とその家族。1990年代以来リストラで失業した人たち、都市に戻った知識青年（辺境支援青年や下放知識青年を含む）、退職して上海に戻ってきた人々、犯罪者などの家族等。
- ③ 土地収用の人々の中の貧困者とその家族。近郊の土地を収用された農民は、農業から非農業となる人々であるが、その職業や身分は全て既に非農業化しており、多くの土地を収用された人々の居住地もまた既に都市化しているので、彼らは都市社会研究の対象に入れなければならない。彼らの中の大部分は、現在低収入の労働に従事するか、失業して求職中の者もいて、まさに都市下層の重要な構成要素になっている。
- ④ 都市に定住する外来工場労働者とその家族。低収入の肉体労働に携わる労働者、ベビーランチ・シッター及び露天商など各種の雑業に携わる流動的な人々を含む。これらの人々は、目下都市住人として認められてい

ないけれども、彼らは都市で住居・仕事・生活しており、その中の大多数、特に若者は二度と農村に戻らない。目下の社会保障体系は、まだ彼らを取り込んでいないが、学術界では多く彼らを「流動人口」と見なしている。事実上彼らは既に中国都市社会の中で有機的な構成要素となっている。

(2) 都市の下層研究の視点と方法について

既存の調査と研究の中に、我々が注目に値するひとつの傾向がある。まず、我々は次のことを見いだすことができる。研究者に比較的多いのは、行政の効用面の立場から問題を設定して研究し、問題意識から概念設定に至るまで、行政の効用面から実際の必要性や制度的枠組みを出発点として、学術的な視点と場を欠落していることである。まさにこのような状況のもとで、都市の中で、研究者は地元に戸籍がない住民を長らく「都市住民」と見なしてこなかった。都市社会研究で、国外では常識となっている都市社会学のかなりの理論、方法、研究成果が、遅延として中国都市社会の研究には運用されていない。

そして都市貧困階層の人々や劣勢の人々に関する既存の研究の中には、巨視的な構造への関心が多いけれども、具体的な社会生活や社会行為の研究が少ない。他方では、社会学者によって出された研究は多数あるが、その問題関心は人口学・経済学・行政学などに接近している。現在の都市新移民や外来下層労働者についての研究は、多くの研究者が「流動人口」「人的資源」の問題と見なし、比較的多くの研究が、社会都市化・都市発展・経済効果と利益あるいは社会秩序の安定についての関心に基いている。しかも今ある都市「社区建設」問題の研究の中で、下層社会の問題は往往にして見落とされている。

目下、中国都市社会が急速に分化している事実と既存の研究現状に基き、筆者は以下の数点について次の研究を試みる必要性があると考えている。

① 都市生態学的研究

区域分布は現代都市の最も基本的な特徴の一つであり、アメリカのシカゴ学派が始めた

都市生態学の研究は、各国の都市研究者が絶えず参照する研究のモデルである。中国において、各種類型の都市区域分布の形成や変化及びその階層分布の影響など、数人の都市研究者が言及する以外は、社会学界で研究者の関心が低い。目下、都市開発や都市改造の風潮、都市計画と都市下層区域が変遷する趨勢、各地域の公共資源（交通・商業・教育・サービス施設等を含む）の享受や配置の状況が住民の階層の分布に及ぼす作用、各種区域の階層と文化的特徴、またどのように住民の生活形態に影響しているのかなど、すべて研究が待たれている課題である。

② 生活構造理論の導入

生活構造理論は各国の都市生活研究の中に、すでに幅広く運用されており、この理論の視点から出発して、経済学者が生活習慣、生活態度、労働力の再生産、家計支出の均衡問題を同時に分析している。福祉学の研究者は家族構成とその連続性を研究し、循環的作動の諸関係の結合様式や形態を研究している。そして社会学者の主要な研究は所属する階層や居住地域、所属団体などの規定が織り成している都会人の生活パターンである。

目下、中国社会学界は、すでに一部の研究者が都市貧困層の生活形態の問題に関心を持ち始めているけれども、生活構造に関連する概念と理論の紹介はまだ現われていない。生活構造理論を参照して都市の下層を研究する必要があるが、なかなか我々は下層住民の生活諸要素の構成、またこれらの要素の間に各種の関連する総体を研究する必要がある。このような研究は、各種の関係を分析する上で、生産と消費の関係、労働と休暇の関係、生活目標と生活手段の関係、家庭目標と構成員個人の目標などの関係、区域の特徴と各種の貧困家庭の生活形態の関係などが必要である。

1980年代以降、中国の都市社会は社会体制と産業構造の多重変化を経験し、目下更に普遍的な都市の大開発を経験し続けており、いかに生活を立て直すかが、すでに都市の下層階級の一つの深刻な問題になっており、下層の生活構造についての研究は非常に切実であ

る。

③ 國際比較研究方法の運用

現代都市社会の貧困問題と都市下層問題の研究は、一方ではグローバリゼーションの問題意識と不即不離であり、他方では必然的に各国都市問題の共通性と差異性をいかに理解するかという問題に波及している。近年、様々な国際共同研究や比較研究が、益々各國の研究者から重視されるようになった。このような研究はグローバリゼーションを背景とした都市研究そのものが必要であるばかりではなく、それと同時に「国際社会学」という新しい領域の形成を促している。これは各國の社会学者の共通課題である。彼らも各國の具体的、実際的現象を研究せねばならず、同時に彼らはかならずそれらの国境を越えた現象を把握して解釈せねばならない。

本稿で筆者が主として検討したのは、社会学がいかに都市下層研究の問題を展開したかという点である。しかし我々は都市下層の調査と研究が、決して社会学者の仕事に留まらないことを承知している。現在の中国で、少なくとも二つの仕事は政府と学界が協力せねばならない。第一は各級の政府が社会の階層化の状況と都市貧困の状況について、制度的に標準化した大規模調査が定期的に必要である。第二は、例えば都市の生態研究・社会生活研究において、社会学は文化地理学・生態学・社会心理学・歴史学などと意見交換をするように、学術界で専門分野を越えた共同研究の展開が必要である。中国の社会学界についていえば、一方では社会学自体に、如何に専門化を推し進めるかという旧態依然とした問題があり、伝統的な人文科学から真に独立した研究モデルとなるべく、相応の専門領域を確立することである。これと同時に、現実的で、かつ切実な問題を社会学は学際的に展開しなければならない。復興して20年余りの社会学は、新興の学問として発展したのであり、これらは決して容易なことではない。

訳注

1. 本論文は、2003年1月14日の大阪市立大学都市文化研究センター上海オフィス開所式・第1回ラウンドテーブルで発表された原稿である。
2. 清華大学の人文科学学院社会学系ホームページに記載された沿革史によると、1926年に社会学部が創設され、1952年に一度廃止されたが、2000年に復活したとある。
<http://www.tsinghua.edu.cn/docsn/shxx/site/xsyg/index.htm>, 2003年7月6日アクセス。
3. Sidney D. Gamble & John Stewart Burgess, *Peking : a social survey* : conducted under the auspices of the Princeton University Center in China and the Peking Young Men's Christian Association, New York : George H. Doran, 1921
4. 「北平」は北京の古い名称。明清期は北京と呼ばれたが、1928年に北平と区別し、1930年に北平市、同年北平直轄市、1937年に北京と改められたが1945年に北平と変更され、1949年から北京となった。薛国屏他編『中国地名辞典』(上海辞書出版社、1990年) 256ページ。
5. 「街道」は、本来ストリートを意味するが、ここでは市区の下の行政単位の名称。

- 李培林等『20世紀の中国：学術与社会 社会学卷』
山東人民出版社、2001年
- 楊雅彬『近代中国社会学』中国社会科学出版社、
2001年
- 何肇發『何肇發文集』栄誉出版社、2001年
- 費孝通『東方赤子・大家叢書・費孝通卷』華文出版社、1999年
- 吳鋒『社会学文集』華東師範大学出版社、2001
年
- 尹繼佐主編『2002年上海城市発展白書——都市管理与市民素質』上海社会科学院出版社、2002
年
- 黎熙六主編『現代社区概論』中山大学出版社、1998
年

中国的都市における下層社会研究の経緯と課題（陳）

- | | |
|---|---|
| 唐忠新『中国城市社区建設概論』天津人民出版社,
2000年 | 閻信平『中国城市貧困問題研究』湖南人民出版社,
1999年 |
| 徐永祥『社區發展論』華東理工大学出版社, 2000
年 | 尹志剛等『下崗与再就業的社会学分析』中国經濟
出版社, 1998年 |
| 雷洁 主編『轉型中的城市基層社區組織』北京大
学出版社, 2001年 | 沈紅「中国貧困研究的社会学評述」『社会学研究』
第2期, 2000年 |
| 陸學芸主編『当代中国社会階層研究報告』社会科
学文献出版社, 2002年 | 王有娟「对目前我国城市貧困狀況的判断分析」中
国統計ホームページ2002.2.25掲載。 |
| 李強著『当代中国社会分層与流動』中国經濟出版
社, 1993年 | |

Research and Perspective of the Lower Strata of Society in Chinese Cities

Yingfang CHEN

(translated by Katsumi NAKAO)

From the beginning of the 20th century, foreign scholars and missionaries began to research the lower strata of society in Chinese cities. In the 1930s, Chinese scholars began sociological research which was suitable for Chinese conditions. Sociology was gradually abolished in the 1950s but was revived in the 1980s. Chinese scholars conducted research about the city life of citizens. In the 1990s, the main research themes were dismissal problems, social class and social poverty problems. This paper summarizes the history of research about the lower strata of society in the cities and raises a very important question concerning the theoretical subject of these studies.

Keywords : lower strata of society, research of urban problems,
research of household account books, poverty problems,
social mobility